
草原ベンチ

白坂 ゆのる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

・草原ベンチ

【Nコード】

N2462C

【作者名】

白坂 ゆのる

【あらすじ】

ちよつと不運な中学校生活をおくる14歳、白。彼のぼんやりとした生活にまるでこどものようなふしぎな女性があらわれる。多感な青春をえがいたものごとがたり。

「ソーげんべんち」

みどりはそうごどもものようにいって、不思議そうにぼくを眺めた。
草原におちたゆびわがひとつ、きらりとひかる。

それを見たぼくはみどりにうそつき、といてせせら笑った。

「あーあ」

ぼくは大きなためいきをついてから、公園のベンチにどっかりと腰をおろした。

どうして最近こんないやなことがつづくのだろう。

階段からおちて足を骨折したせいで、せっかくとれそうだった野球部のレギュラーの座ものがすし、

入院しているあいだに親友があたらしい友達をつくってしまった。

それにかんばって勉強をしているのに、テストの点数もあまりあがらない。

どうしてぼくばかりこんなにもついてないんだろう。

気がつけばいつもそのことばかりが頭をよぎる。

神様なんているのだろうか。少なくともいまのぼくに神様はいないだろう。

だれかを恨むことしかできないこんな自分にも、自己嫌悪してしまう。

そんななかで空の青さばかりすがすがしくて、よけいにいらいらする。

目のまえの遊具でおもいつきりあそぶ子どもたちがうらやましい。

なにかをおもいつきりしたい、やりたい、叫びたい。

そうしたら、できたら、このもやもやも晴れるだろうか。

でももうなにもしたくない。

もういつそのこと、このまますわった状態で石になりたい。

なにも感じたくない、みたくない。

「あーあ」

また大きなため息を胃からもやもやといっしょにだした。

でもすつきりしたのは一瞬だけで、また余計にいらいらした。
足元の蟻をふみつぶしてみても、蟻はぼくをばかにするよつに靴の
すきまからでていく。
蟻までにもばかにされるなんて、とぼくは苦笑した。

そんなときだった。

ぼくの耳にカップルの口論が耳に入ったのは。

カップルはまるでドラマかまんがみたいに、ぎゃあぎゃああとケンカしていた。

「ひときがわるいのお」

「みどりこそ！いつだってそうじゃないか！」

「もういやあ」

「ないてごまかすなよ！」

男のほうのすがたはよく見えないが、女のほうは20歳くらいだろうか？

黒いながめのスカートに、ヒョウ柄のTシャツを着ていた。

なんともふしぎな格好だったが、女は手で顔をおさえている。

どうやら泣いているらしい。

が、男はそれにかまうことなく女をどんどん責めたてる。

まわりで遊んでいた子供たちもぽかんとカップルをながめている。こついうことには関わらないほうがいいとおもったぼくは、下をむいていた。

蟻ももうそこにはいなかった。

のんびりとした公園のなかでカップルだけの声が響きわたる。

しかしそれも男があきれて、捨てゼリフっぽいのを吐いて去ったことで終わった。

去っていく男を引きとめようとせせずに、ヒョウ柄の女は泣きくずれていた。

女の体が小刻みにうごく。

おとなって…あんなに泣くもんなのか？と必然的に疑問もつまれる

くらい、女は泣きつづけた。

もうだれも女を見てはいない。

こどもも、おとなも、みんな女なんて見えていないかのように振舞う。

その女の姿は、なぜかぼくとかぶってみえた。

「…おいかければいいのに」

ぼくがぼつりとつぶやいた時、女はすつくと立ちあがった。

まるでぼくの声が聞こえたかのように、ぼくのほうへずかずかと歩いてくるのだ。

さすがのぼくもじぶんの声がきこえたのではないかと焦った。

女はヒヨウ柄をゆらしながらぼくのほうへむかってくる。

そしてぼくのとなりにも、ゆっくりと腰をおろした。

やっぱり聞かれたかな？とおもっておそろのおそろとなりを見ると、女は空をじいつとみていた。

べつに怖そうなひとではなかったので、思いきって声をかけてみることにした。

「あのう……」

「なあに」

女はこちらをむいた。肩まである茶色い髪がさらさらと風になびく。一瞬できれいなひとだと思った。

「きこえましたか？」

「なあにが？」

「あ、じゃあいいです」

そこまで言って、聞こえたわけじゃないと安心してひと息つく。すると女はたのしそうにきやらきゃらと笑った。

泣いたり、笑ったり、いそがしいひとだ。

「なまえはなあに」

初対面でいきなりなまえをきくのか？

そう思ったがぼくはおとなしく白です、と応えた。

「いぬさんみたあい」

女はそういつてまたきゃらきゃらと笑う。

「あたし、みどり」

「みど、り？」

ぼくがゆっくりと復唱すると、みどりさんはおおげさに自分をひとさしゆびでさした。

そしてこんどはききき、とあやしげに笑う。

「しろちゃんか」

「みどりさん」

「みどりでいいよ」

ぼくがよびすてでいってもいいか悩んでいると、みどりさんはまた自分をゆびさしながら

「みどり、みどり」

と何回もいつてみせた。

「じゃあ、みど…り」

「よろしい」

みどりは、そんなにもうれしいのかと思うくらい、にぱつと笑った。

ぼくは、そんなみどりをこどもみたいになひとだとおもった。

みどりの本名は朝岡みどり、というらしい。ぼくがきいてもないのに勝手に話してきた。

22歳のOLで、ヒョウ柄がすきだということも、血液型はO型だということも、誕生日がクリスマスイヴだということも、うれしそうにきゃらきゃらと勝手に話してきた。

その姿はいままで恋人とケンカをして、泣いていた人物とはとてもおなじには見えなかった。

「しろちゃあん」

いまみどりは水道の水を使ってこどもといっしょにはしゃいでいる。ぼくはそれをベンチからずうっと見ていた。

あれじゃ、どっちがこどもなのかわからない。

やがて遊びつかれたらしいみどりは、こっちへきてまたぼくのとなりに座った。

「こどもみたいだ」

「あは」

「うん、ほんとにこどもだ」

「ひょうがら、すきなのに」

「ませたへんなこどもなんだよ、みどりは」

「あは」

みどりはへんな笑い声をあげて、すっくと立ちあがった。

「あ、いちばんぼし」

か細い腕で、いちばんぼしをさす。

その姿はやっぱりこどもで、22歳なんて信じられなかった。
いちばんぼしは少しくらくなくなった空で、誇らしげにかがやいていた。

「ね、しろちゃん」

もう空がすっかり暗くなったのに、ぼくたちはまだベンチに座っていた。

公園にはもうぼくたち以外、人かげはなかった。

ぼくは「ん」とだけこたえて、まっくらな空をみている。

「あいつてなあに」

「しらん」

いきなりそんなことをきかれても困る。

「あたしはしってる」

「あつそう」

「うん」

こどものくせに、と言おうとしたがみどりの声は真剣だったから、
言えなかった。

月のひかりがやさしくぼくたちを照らす。

「きかないの？」

「なにが」

「きょう、あたしがけんかしてたわけ」

「うん」

「そう」

べつに、そんなことどうでもよかった。

気になっていない、といえぼうそだが、みどりのことだから、いつ
かきまぐれにはなしてくれるだろう。

そこまで思ったところで、ぼくとみどりはきょう初対面だったこと
を思いだして苦笑した。

ぼくがみどりにいだく感情は、まるで幼いころから見知ったひとに
いだく感情のようだったからだ。

「あしたもくるの？」

「わからない」

「ん、ろくじにいるかも」

みどりはそう言って、さよならもいわずに走っていった。

みどりがどんだん闇夜にすいこまれていくように、すこしだけ恐く
なった。

めざめたら、もう朝だった。

下には汗でしめったふとんがあつて、上にはちゃんと屋根もついていた。

「…きのう…どうやってかえったっけ」

しばらく考えたけれど、こたえがでなかったので、やめた。

もぞもぞとおきあがると、時計のはりは朝5時をさししめしていた。外からぽつりぽつりと雨のおとがする。

「しろ、おきなさい」

とびらが開いた音がした、と思つたら母の声がきこえる。

もうひとねむりしたかったが、となりのへやからめだまやきのおいがして、いやでも胃が反応した。

欲求にさからうことも面倒くさくて、おおきく伸びをしてからぼくはふとんから出ていった。

「おはよう」

リビングでいそいそとはたらく母に声をかけると、母もおはよう、と言った。

が、母の視線はぼくには向かなかつた。

「ごはん、できてるから」

消えゆきそつな声で母がぽつりとつぶやく。

テーブルのうえに目をやると、そこには焼きあがったためだまやきと、白い湯気をたてるごはんがあった。

ゆっくりと席について、いただきますも言わずに食べはじめるが、

母は何も言わなかった。

部屋をみわたして見ると、やっぱり今日も父はいない。

「とうさんは」

ぼくが聞くと、母は一瞬びくつとからだを震わせた。

「…おとうさんね…ほかのおんなのひとのところにいるの」

「また？」

「…ええ…」

会話はこれで終わった。

父が浮気をするのもつめずらしくなくなったことだから、ぼくは別におどろかなかった。

めだまやきの黄身をおおう膜にはしをつきさすと、とろりとした黄身がでてくる。

ほおぼるとかすかに甘い味がした。

あまつたるくて、だけどしよっぱかった。

「しろ、おかあさんとおとうさん、どっちにつくの」

「え」

「りこん、するかも」

「え」

覚悟していたことだが、いざするとなるとぼくはとまどった。

母の表情を盗み見ようとしたが、下をむいていてわからない。

「わかんない」

あいまいな返事をする、母は「そう」「とだけ言って皿を洗いだした。

もうひとくちほおばったためだまやきのしよっぱさがました気がした。

白紙だったノートは黒で満たされていく。

ぼくは複雑なきもちを感じないように、授業へ没頭していく。でも、どうしても数式は頭にはいらなくて、苛々した。

「さわぎさん、これ、どやってとくの」

となりの女子がそう言いながら教科書の一問をみせる。

無視したかったが、そういうわけにはいかないの、ぼくはシャーペンを取りだして教えた。

はじめは乗り気ではなかったけれど、教えているときもちがまぎれなかった。

ふいにとなりの女子を見ると、そのあどけないすがたにみどりが重なった。

なぜか、むしようにみどりにあいたくなかった。

「きょう、いけるかな」

ぼそりとつぶやくと、女子が鉛筆をとめてえ？と言ったので、ぼくはあわてて「ううん、なんでもない」とこたえた。

後ろの窓からはいつてくる雨のおとがみどりのようで、ぼくはまた複雑なきもちになる。

ぼくにはそのきもちが一体なんなのかもわからなかった。

学校が早く終わってからぼくは公園に直行した。

ベンチの前でたっていたぼくには、雨が傘にあたる音しかきこえなかった。

「わあ、くろいかさだね」

突然ふってきた雨の声とはちがう甘ったるい声にぼくは上をむいた。

そこにはやっぱり、みどりがいた。

みどりは赤い、水玉のかさを両手でもっていた。

そしてすきだというヒョウ柄のスカートに、白いシャツを着ていた。傘の柄と服がちぐはぐでおとななのか、こどもなのかよくわからない。

「まあた、あえたね」

みどりはまたうれしそうに、きゃらりと笑った。

「いまるくじなの？」

「ううん、よじだよ」

「どうして」

「しらなあい」

くるりとまわって、みどりはうしろをむく。

「あめがね、すきな」

みどりの表情はわからない。

傘にプリントされた赤い水玉だけがぼくを見つめる。

「しろちゃんは？」

「わからない」

「どおしてえ？」

みどりはやっとこちらをむいた。

大きな赤の水玉の傘に、そのちいさなからだはのみこまれている。

「あめって、かなしいから」

まるで、ぼくのこころみたい。

みどりはふうん、と言って傘をてのひらでくるくるとまわす。水玉がいつしよにまわる。

「みどりはどうして雨がすきなんだい」

「しらなあい」

傘はまだくるくるとまわっている。

「あのひととね、あったときもあめだったの」

「あのひと？」

ぼくが聞きかえすとみどりはうん、とうなずく。

「うん。あのときケンカしてた、ひときくん」

ああ、彼氏か。とぼくは心の中でうなずいた。

時おり消えゆきそうなみどりの声が、雨で掻き消されてしまうのではないか、と心配になる。

「あめのなか、いぬとあそんでいたの。それをあたしはじっとみてる」

「それって、ノロケ？」

「わかんない」

「なにそれ」

「うん、わかんない」

みどりは自分で言っていて、自分で勝手になっとくしている。

「けんかのあと、あったの？」

ぼくがきくとみどりは表情もかえずに、首を横にふった。

「なんだか、こわくて」

「すきなんじゃないの」

「すきよ」

すきよ、といいつつみどりの表情には変化がないから、あまりよくわからない。

それからみどりはひとつ、おおきく深呼吸をする。

「しろちゃん」

「ん」

「あいつてなに」

「それ、きのうも聞かれた」

「だってわかんないんだもん」

「あっそう」

ぼくはそういつてすこしだけ笑った。

みどりもつられてきやらきやらと笑う。

「あめはすきよ」

「なにいきなり」

ぼくの答えにみどりはまゆをしかめた。

水玉の傘と、黒色の傘が並んでいた。

「しろちゃんのばーか」

みどりはそういつて泥をすくい、ぼくにかけた。

さつとよけようとしたりたけれどすべって、ぼくはお尻から転倒する。

ゆっくりと冷たい水がお尻にやってきて、じんわりとした痛みがひろがる。

「あは」

「やったな」

仕返しにもぼくも泥をすくってみどりに投げた。

するとみどりはぼくをきつとにらんで、またやり返す。

もう、雨に濡れるのも、泥にまみれるのもいとわなかった。

むしろそれはなによりも清々しかった。

すこしだけ、雨がすきになれたような気がした。

干されたどろまみれになった服をみながら、ぼくはわずかな快感をおぼえる。

世の中に、あんなたのしいことがあつたなんて知らなかったから。みどりがぼくを呼ぶ声がよみがえってくるようで、ぼくはその服から目を離せない。

「しろ」

「しろ」

気付くと扉の前に母がいた。

髪の毛なんてぼさぼさで、化粧つけもまるでなくて、その姿は前までの母と同一人物だとは思えない。

ぼくは母をみて、きょうの朝言われたことを思いだす。

なかなか話をきりださない母にぼくはしびれをきらした。

「…母さんはかわったね」

「しろ…？」

「むかしの母さんはそんなじゃなかった」

こんなこと、母を傷つけるようなことは言つつもりなんてなかったのに、ことばが堰をきつてあふれでる。とめられない。

「しろ…母さん…どうすればいいの？」

母は一瞬にして床につつぶして泣きくずれた。

こんなに弱い母を、見たくなかった。

ぼくたちが過ごしてきた時を裏切られるような気がしたから。

「そんなの、しらない。母さんがかんがえなよ」

「…しろ……」

涙をぬぐって、さみしげに母は扉を閉めた。

静かな部屋のなかでまた自己嫌悪。

やさしいことばをかけてあげようと思った。でもできなかった。

母を責めることしかできない自分

母と父をどうしようもできない自分。

ぜんぶがぜんぶ、ぼくで、ぜんぶに激しい嫌悪感をおぼえた。

「…ごめんなさい」

もう母には聞こえないとわかっていても、つぶやいてしまった。

それがいまのぼくにできるせめてもの償いだった。

いつのまにかぼくのひとみからも、冷たい雨のようなしずくが流れていた。

もう、ほんとうにどうすることもできないのだろうか。

否、答えがわかってても、いまのぼくじゃそれはできない。

なぜかそんな気がした。

そのあとぼくは窓からこぼれる月のかおりに抱かれて眠った。眠れば、すべてから逃げられる気がした。

そして、夢をみた。

波間に身をあずけて、ただただ魚たちと戯れる夢を。

夢のなかなら想像するだけでなんでもできる。

空を飛ぶことも、すべてを手に入れることも。

けれど、ぼくたちが生きているのは現実。

思い描くだけではどうにもならない。

なんとも不自由で、暮らしにくい世界だ。

ぼくたちはそこから逃れることは決してできない。

ただ自由を許されるのは、夢をみることだけ。

「しろちゃあん」

頭のなかでみどりの声がする。

午後に飲むハーブティーのような、甘くてきれいな声だ。

「どうして、ないているの」

知らない。ただ、なみだがあふれてくるんだ。

頭のなかで返すと、みどりはふしぎそうに頭をかたむけた。

それからうふふときれいに笑う。

「じゃあ、ないて。おもいつきり、空にむかって」

そのことばで、ぼくのなみだはついにとまらぬものとなった。

みどりの声が消える。

雨の音で、月の音で、空の音で。

きえかけたみどりの声は最後に笑った。

「もお、だいじょおぶだね」

ひとの声は、こんなにもあたたかいものだとはじめて知った。

「みどり」

白くて、生活感のまるでない天井に両手を捧げる。

おきぬけだからか、身体はあまり動かなかったけれど、頭だけはさえていた。

顔をゆびでなぞると、なみだはもう流れてはいなかった。

うつらうつらと日付を確認して、きょうは土曜日だったことに気付いた。

そして、昨日みどりと、いつに会うのか約束してなかったことも思い出す。

「…いるかな、みどり」

頭の中に公園でこどもたちと戯れるみどりが浮かぶ。

刹那、みどりにはやく逢いたくなかった。

早くみどりに会うのだと思うと、身体はスムーズに動いてくれた。

きのうのこともあって、おそろおそろ扉をあけると、そこに母の姿はなかった。

「…かあさん…?」

呼んでみても、返事はない。

どこかへ出かけたようだ。

でもきのう言ったことに対する後悔が、ぼくの中にあつたから少し安心した。

食事は机の上においてあつた適当なものですませて、ぼくは外へでた。

早足で外にでてみると太陽のひかりがまぶしかった。

ぼくはそれを避けようとせせず、ただ早足で歩いていく。

みどりの顔、みどりの声、すべてに早く逢いたかった。

そうすればきつと、どんなぼくであろうと、みどりはやさしく受け容れてくれるから。

そう思うと、自然に顔がほころんだ。

両親のことも、色んなことも、今はどうすればいいのかもわからない。

でもみどりに逢いたい、ということだけははっきりとしていた。

「しろちゃん」

幻覚かもしれない。

後ろからみどりの声がした。

やさしくて、甘ったるいきれいな声。

「しろちゃん」

幻覚にしてはあまりにはっきりとしていた。

ぼくは後ろを向く。

そこにはガードレールを危なっかしく歩く、ヒヨウ柄があった。

「まあた、あえたね」

きのうと同じで、みどりはゆっくりとほほ笑んだ。

ヒヨウ柄のはでなワンピースがひかりを浴びて、かがやく。

夢でもいい、ぼくは確かにそう思った

「きょうはワンピース？」

「うん」

みどりはまたうれしそうにきゃらきゃらと笑った。

その笑い声はまるで水のようにだとぼくは思った。

公園について、どさりと寝転がったみどりは、真っ青な空に手をあ
りつたけのぼして

「おほしさまあ」

とおおきな声で言った。

「いま、お昼なんですけど」

「しろちゃん、しらないの？」

「なにが」

ぼくがしかめつらをしてみせると、みどりはさぞかしたのしそくに
笑った。

「おひるでも、お星さまはかがやいてるんだよ」

疑いなんてしらない、まっすぐな無垢のひとみがぼくを見据えた。

茶色がすこし混ざった、きれいなひとみだった。

すこしだけ、胸が高鳴りを覚える。

「あたしも、しろちゃんも。ずっと、かがやいてるの」

そのきゃしゃな胸に手をおきながらみどりは言った。

かみのけが風にふんわりとさらわれる。

「どうしてかがやくんだい」

「じぶんをね、みつけてほしいから」

「どうして」

「さびしいからだよう」

みどりはそういって、またゆっくりときれいに笑った。

そのことばにはまったく飾りたてたものがなかった。

だから、まっすぐぼくの心にふかくふかく響く。

「みどりも、さみしいの？」

問いかけると、みどりはすこしだけおどろいたような顔をする。

そんなみどりの顔を見たのはじめてだった。

不安とか、かなしさとか、たくさん感情が入り雑じった顔だった。

鳥が頭上できゅるゝと世界に囁くように啼く。

みどりはそれをまぶしそうに見つめていたけれど、なにと言わない。ぼくがちらりと盗みみたその表情は、かおこころなしかすこし、さびしそうだった。

葉っぱのやさしさ、太陽のひかりかがやく粒子、空気のきれいなこきゅう。

すべてが今のぼくにはまぶしすぎて、ぼくはひとみをゆっくりと閉じた。

目をさまして、ふととなりをみるとみどりがいなかった。

ぼくはあわてて起きて、あたりを見回す。

すると水のみ場にみどりはいた。またこどもと遊んでいる。

ひとまず、ぼくはほつと胸をなでおろした。

「しろちゃあん」

みどりはぼくに気付いたらしく、おおげさに手をふってくる。

手を振りかえして、ぼくもあることに気付いた。

みどりの左手に、たいようにきらりと反射するものがついている、
ということが。

胸が、おおきく高鳴っていく。

はじめての感情が、ぼくの胸を支配する。

息苦しい。こきゅうが、できない。

「しろちゃん？」

「それ」

「え」

みどりはぼくのゆびさした方向をみた。

左手のくすりゆび。そこにはみどりいろの大きな石がついた、指輪
がはめこまれていた。

みどりはそれを見てなんともいえない顔をする。

「これ？」

「うん」

まるで幸せをみせつけるかのように、みどりはそれをぼくの目の前
においた。

「かれがね、くれたの」

「どうして」

「けっこん、しよつって」

そのとき、みどりは後ろをむいてしまったから、表情はわからなか

った。

黒くて、いびつな感情が、ぼくの胸のなかにたまっていく。みどりとぼくとの平穏な日々。

それにすべてを奪われてしまいそうで、こわかった。

みどりをそれにとられてしまいそうで、こわかった。

でも、ぼくはあくまで平静を装って「おめでとう」「ただけつぐやいた。

もう別れはせまっていた。

「ほんとに、いいの？」

ふいにそんな声があった。

みどりの声だった。ぼくがなにを言ったのか質すと、みどりは

「なんでもない」

そういって、わらった。

みどりに逢えたこと。それは数少ないぼくの幸運のひとつだとぼくは思っていた。

「けつきよく、みどりにあえたことだつて不幸だつたんだよ」

空の青さとか、くものしろさとか、ぜんぶが色褪せた気がする。かわりに色を濃くしたのはきつと、ぼくのなかのきたない感情^{きせつじやう}。みどりと別れたあとも、ぼくはずっとベンチにすわっていた。

なにを考えるわけでもなくて、ただずうつとすわっていた。

「み、ど、り」

つぶやいてみても、みどりはいない。

いくら呼んでみたつて、みどりの笑顔はぼくにはない。

暗くなった空からとうめいのなみだが空気をつたつてこぼれおちる。ひんやりとしたものがぼくを冷たくつつむ。

でも、ぼくは決してベンチから離れようとはしなかった。

否、離れられなかった。

このベンチを離れたら、みどりと糸ともいえるものが、なくなってしまうような気がするからだ。

みどりは今頃、ケンカをしていた彼氏と仲直りのお祝いでもしているのだろうか。

みどりの笑顔は、ぼく以外に向けられているのだろうか。

そう思うと、大きな損失感とも言えるものが雨といっしょにふりそそいだ。

服が肌に貼りついて気持ちが悪い。

嗚咽が胸のそこからこみあげてくる。

そしてぼくはついに意識を手放す。

からだがだるかった。

もう、こきゅうなんてしなくなかった。

冷たいものだけが、ただベンチに横たわったぼくを撫でて、けつき

よく去っていくのを、きえゆく意識のなかでぼくは断片的につかんでいた。

かすれゆく意識のなかで、母をみたような気がした。雲のすきまからもれる、茜色のひかりがぼくをうつす。ゆっくりと目をあけると、そこには母の姿があった。

あたたかいふとんにくるまれて、ぼくはもうベンチの上にはいなかった。

「しろちゃん！よかった…」

そう言つて、母はわっと泣きだす。

母の目はさつきも赤かったから、きつとずつと泣いていたのだろ
う。

からだか熱いとおもった。

頭もぐわんぐわんとしてきもちがわるい。

ぼくは寝巻きに着替えされられていたが、汗がぐつしよりと流れ
ていた。

「…かあさん…ぼく…」

吐息がまざった声でか細く問いかけると、母はなみだをふいてこ
ちらを見た。

その姿は弱々しくて、いつ消えてしまってもおかしくないとぼくは
思う。

「母さん、あなたがかえってこないからさがしたのよ。そしたらあ
なた、公園のベンチのうえで倒れてて…。ほんとうに、すごい熱だ
ったの。いままでずつとねむるくらいに」

大体ことのあらましがつかめたところでぼくは起き上がるうとした。
でもからだか重くて、言うことを訊かない。

それを見た母は、ぼくをゆっくりと静止させて、ふとんに寝かせた。
そしてゆっくりと笑って、ぼくに問いかける。

「なにかたべる？」

ぼくはその問いにバナナ、とだけ答えてひとみを閉じた。

ほんとうは眠りたくなかったけれど、激しい眠気がぼくを襲う。
瞬く間に、ぼくは夢の世界へと落ちていった。

「しろちゃん」

「しろちゃん」

誰、ぼくをよぶのは。

暗闇にむかって話しかけると、どこからともなくきやらきやらと笑い声がした。

「みどりかい」

そう問いかけてみてもへんじはない。

ただきやらきやらとした笑い声が止まないだけだ。急にぼくは不安になる。

まっくらな闇が、ちっぼけなぼくを押しつぶしてしまいそうだった。

「ねえ、みどり、みどり」

必死でよびかけても、やはり答えはなかった。

きえていくきがする。ぼくも、みどりも何もかも。

その瞬間、ぼくは目を覚ました。

また、全身に汗をぐっしょりとかいていた。

熱はさがってはいないようで、からだは熱かった。

虫の音がきこえる。

あたりはもう真っ暗で、母の姿もなかった。

「あ、あ、あ」

暗闇の中で、ぼくの存在をたしかめるように声をだす。

たしかにぼくは此処に存在しているようで、すこし安心した。

どうして、夢の中にみどりが出てくるのだろう。

そのなまえと同じ色をした幸福の証に、ぼくはどうして嫉妬したのだろう。

どうしてぼくはみどりのことしか考えていないのだろう。

「わから、ない」

どうすればわかるのだろう。

どうすればこの想いを断ちきれerのたろう。

「わからない」

ふとんの中で寝返りをうつと、そこも湿っている。

ぬれたふとんをちろりと舐めてみると、そこはすこししょっぱかった。

なみだと同じ、味がする。

また嗚咽がこみあげてくる。

何回も何回もしゃくりあげてはみどりの顔が浮かぶ。

ヒョウ柄に身を包んだきゃしゃな体つき。

きゃらきゃらとした笑い声。

とてもおとなには見えないそぶり。

そしてぼくを救うなげないひとこと。

それがみどりだった。いとおしくて、恋しくてたまらない。

あえるだけで、思い浮かべるだけでぼくは幸福だった。

でも、みどりにとっての幸せはぼくじゃない。

幸福の証を与えてくれた、ぼくではない他の男のもとにそれはある。

ぼくじゃ、みどりは幸せにはなれない。

悔しいけど、それが事実。

朝になっても熱は冷めなかった。

意識は朦朧としていて、起き上がることもできない。

「はい、39度8分ね」

母がそういつてつかい終わった体温計をケースに置いていねいにしまう。さつき雑炊を食べたので空腹は感じなかった。

「がっこう、やすみのれんらくいれたから」

ぼくはそれにうん、とだけ相づちを打つ。

すると母は安心したような表情になって、すこしだけ笑った。

「じゃ、かあさんかいものについてくるね」

「うん」

エプロンを小脇において、母はいそいそと出ていった。

扉がしまる音をきいて、ぼくは大きなため息をつく。

すると頭がまたぐわんぐわんとして、気持ちわるかった。

でも内心ぼくはすこしだけ安心していた。

みどりにあいたくなかった。

あいたくない、あえない口実ができたからだ。

もう、これ以上ぼくのころをみだされなくなかった。

今までとちがう自分になっていく、自分がこわかった。

空が青いのが窓越しにつたわる。

せみの鳴き声とか、小鳥のさえずりとか、雑音ばかりが胸へと飛びこむ。

そのすべてが、どうしてか、みどりを感じさせられた。

ぼくは耳をふさいで、ふとんへと逃げ込んだ。

怖かった。恐ろしかった。

「やめてくれ」

もう、これ以上ぼくをくるしめないでくれ。

でもどうして、こんなにも君を思い描いてしまうのだろうか。

君の笑顔、泣き声、囁く声、すべてが、すべてが恋しかった。
会いたくないのに、恋しかった。

そのまま色々考えていたら、いつのまにか夕方になっていた。ふとんから手だけをはいだして、枕元においてあった携帯電話をつかみあげる。

そしてかぱっと開けてみても、なにも着信はなかった。

「…メールくらい…くれたっていいのに」

ぼくは、もうほとんどしゃべらなくなった親友への呪詛をこめてつぶやいた。

ぼくが入院しているあいだに、彼はほかのともだちをつくってしまっただの。

退院したあと話しづらかったのもあって、ぼくたちの距離はしぜんと離れていった。

いままで築き上げてきた友情も、いったんこわれると脆いものだ。去るものは追わず。

そのことを胸に、ぼくは学校でよくひとりであるようになった。

悲しかったけれどしようがないと、ぼくはあきらめた。

ぼくの学校生活はいつたい、何だったのだろう。

べつにもう部活も居づらくなってやめたし、勉強だってできるほうではない。

けっきょく、ぼくのことなんてだれも興味がないのだ。

いまさら青春しようとか、そんなことも思わない。

「ぼくって、なんのためにいきてるんだろ」

いきる意味なんて求めたらほんとうにきりがない。

でも、求めずにはいられない。

「あーあ」

ことばで投げ出してみても、虚しいきもちを抑えられない。

みどりだったら、こういうときどんなことばをかけるのだろう。
みどりにとって、ぼくはなんだったのだろう。

自分でいきる意味を探せないのだったら、せめてひとにみつけても
らいたい。

そこまで思ったところで、またみどりのことを考えている自分に気
づいた。

なんだか急に自分がみじめに見えた。

「あーあ」

また投げ出しても、ことばは虚しくくうきと一体化しただけだった。
いきる意味なんてしらない。わからない。

もう、自分がなをしたいのかさえいまのぼくにはわからない。

「み、ど、り」

「みどり」

拒絶してみても、やっぱりみどりが恋しかった。

みどりにあえばなにかが変わるかもしれない。

そんな、あまい期待さえ抱くくらいに。

寝るまえにはもう熱はさがっていた。

母はそれをみて、ひとまず胸をなでおろしたようだった。

「かあさん」

母をよぶと、彼女は内職のうでをとめてこちらをむく。

母のかみのけにはいつのまにか、白いものまで混ざっていた。

「…ありがとう」

「なにいつてるの。親が、こどものめんどろみるのはあたりまえでしょ」

くすくす笑ってから、母はまた内職へと視線をもどす。

「…とおさんと…どうするの」

母の内職の手がぴたりととまった。

聞きたくはなかったけれど、いつかは解決しなければいけないことだ。

ぼくはどきどきと脈打つ心臓を落ち着かせたくて、おおきく息をすいこんだ。

母もおなじようで、肩が上下にひとつ、揺れた。

「わからない…でも、もうだめなのよ」

母がそういうということは、もうきつとほんとうにだめなのだろう。今まで築き上げてきた家族、というものをかんたんに壊せるくらい、父と母の確執は深かったのだ。

でも、もう仕方がない。

母も、ぼくも、もう十分に苦しんだ。

「そう、しかたないんじゃない」

母の表情はみえなかったけれど、きつとぼくたち、すごくかなしかった。

彼女の背中が、小刻みに揺れていた。

父の愛をつなぎとめられなかったこと。

おおきな問題を前にしてもなにもできない無力さ。すべてが、すごくすこくかなしかった。せめて、しあわせな家庭でありたかった。

でも、もうきつとぼくたちはばらばらになる。

遅かれ早かれ、それはきつと必然だった気がする。ぼくたちがすこしだけ、早かっただけなのだ。

おわりは、あまりにあっけないものだった。

その翌日、ぼくは机の上におかれた感情のない白い紙をみつけた。

「り、こ、んどどけ」

そこに大きく書かれていた無機質な文字をゆっくりと読みあげた。母のなまえとか、父のなまえとか、ぜんぶが黒い字で書かれていた。そして、そこにぼとりとおちていた黒くて丸い染みも、ぜんぶぼくはみつめた。

こんな紙切れいちまいで、いままで築き上げてきたものがすべて壊れるのだ。

思い描いていたよりそれは、あまりにあっさりとしたものだった。ぼくたちはおわる。

そこから何か、あたらしいものはじまると信じて。

これからまた苦しい現実を、ゆめをみながら生きていくのだ。

もうふとんから起き上がってごはんもたべれるようになったので、ぼくは机に座っていた。

そこへ母がやってきて、ことりとトーストがのった皿を置いた。

「きょう、がっこうにいくの？」

もうすっかり元気になったぼくを見つめながら、母はいった。

ぼくはそれに答えるのに、すこしためらってからうなずく。

「そう、からだにきをつけてね」

母はすこしだけ笑ったが、どこかその笑みはかなしげだった。

ぼくもあいまいに笑みを返してから、目の前のトーストにかじりついでみる。

するとさくり、と音をたてて、あっさりとパンはぼくに引きちぎられた。

バターの味が、ほんのりしょっぱかった。

制服に着がえて靴をはいていると、後ろからいつてらっしやい、と母のこえがきこえる。

ぼくはそれに応じてから、外へと扉をゆっくりとあけた。

朝のひかりが、まぶしかった。

学校までのみちのり、朝早すぎて、ひとかげもまばらだ。

携帯をいじくりまわしながら歩く高校生、忙しそうに走っていくサラリーマン。

ともだちとこづきあいながら笑う小学生。

すべてが朝のひかりをあびて、まぶしくひかっていた。

ぼくのすがたは、あのひとたちにどううつっているのだろうか。

ぼくのすがたも、あんなふうにまぶしいのだろうか。

そこまで考えてから、ぼくは考えることをやめた。

ひとからどう思われようが、ぼくはどうにもならないからだ。

ぼくがぼくであること。

この事実はどうなことがあっても、けして変わることはないものだ。

「おはよう」

ふと、後ろから声をかけられてふりむくと、そこにはなつかしい親友がいた。

「逢坂あつきさか」

ぼくが彼のなまえををよぶと、彼はすこしだけ照れたような表情になった。

そしたら彼も、ぼくのなまえを確かめるように呼んだから、ぼくはうん？とへんじをした。

「ごめん、さわざき」

「なにが」

「おれ、おまえのことさけてた」

「しかたないよ」

逢坂はしゅんとしているようで、声にいつもの張りが無い。

「おこつてる…よな」

ぼくはその問いかけに答える前に、空をみてすうつと息を吸いこんだ。

そして、やわらかくほほえんで、「おこつてないよ」と伝えた。

ひとに、自分のきもちを伝えることは難しいけれど、ぼくは笑って伝えようと思った。

そうすれば、きつとつたわると、今のぼくにはなんとなく、信じる
ことができた。

逢坂の表情がぱつと明るくなる。

逢坂も逢坂なりに悩んでいたのだろう。べつに責めるべきことではない。

それ以上に、ぼくのきもちが逢坂に伝わったことがすごくうれしかった。

「いいよ、これからとりもどせば」

ぼくはそうつけたして、たつと走りだした。

逢坂がまてよう、といいながらあわててついてくる。

朝になびく、みどりいろの風がぼくたちをやさしくつつんでいた。

人生なんていやなことばかり、そうつぶやいていたぼくがいた。

でももう、それも終わるかもしれない。

どんなことでも、受け入れるつよさを、ぼくは欲しかったのかもしれない。

そこまで思っ、ぼくは疾走することをやめた。

土手のうえの若葉が、ふんわりとぼくの足を受け止める。

肩がゆれて、何回も何回もくうきを吸い込む。

逢坂もやつとぼくに追いついて、肩でこきゅうをしていた。

「あは」

まぬけづらで笑って逢坂をのほうむくと、逢坂も息をきらしながら、けけけと笑った。

「なかなかおり、だね」

ぼくは手をすつと差し出すと、逢坂は鼻っ柱をゆびでこすってそれに応じた。

つなぎあわせた手から、逢坂のあたたかさがゆっくりと伝わってくる。

「またよろしく」

逢坂はにっと笑って、まっすぐにぼくを見据えた。
ぼくはその瞳から、もう目をそらさなかった。

みどり、すべては彼女から変わった。

そしてぼくは気付きはじめていた。みどりへの、すなおな想いに。

ああ、もうすぐ梅雨があける。

きょうの空が、急に暗くなったりしたのをみた先生がそうつぶやいた。

えんぴつを進める音だけがきこえる教室には、その声はよく響く。そしてぼくも、それをつよく痛感していた。

ふととなりをみると、女子がぼんやりと空をながめている。

虚ろとはいえないけれど、こころなしかそれはすこしかなしそっだった。

逢坂はというと、机につつぶして、安らかな寝息をたてている。

ぼくはそれに思わず苦笑してしまった。

なにこともない、ありふれた景色。

だけど今のぼくには、それすらもきらきらと輝いて見えた。

今日は、公園にいけるだろうか。

どうせもうみどり離れていってしまうのなら、残された時間をたいせつにつかいたい。

せめて、この想いにきづいた今、ぼくのぞみはそれだけだった。

そこまで考えて、病んでるな、とさすがにぼくは苦笑した。

授業がおわって、逢坂がぼくの席に来てくくとやってきた。

授業中とは違ってかわって、生き生きとした逢坂がおもしろかった。

「なかなかおり、したんだよな？おれたち」

「うん」

「じゃ、なかなかおり記念つてことで」

逢坂は紙パックにいれられた牛乳をぼくの机においた。

なかなかおりすると、どちらかが牛乳をおこるのだ。

それがいつのまにか、昔からのぼくたちの習慣になっていた。

ぼくはそれをまじまじとみつめて、けけけと笑う。
すると逢坂もにやりと不敵に笑って、ぼくの左手を叩いた。
ぱしんとした、いい音が教室中に響いた。

オレンジ色のひかりを見ながら、ぼくはぶくく、とわらった。

草原もオレンジ色に染まって、ベンチもオレンジ色に染まるようだ。

「みどり」

呼んでみても、へんじはない。

あのみどりいろのわっかをつけて、ぼくの前にあらわれるのかと思うと心が痛む。

けれど、それがみどりの幸せなら、ぼくは残りの時間をたいせつに遣いたい。

心が痛むとしても、この想いはかなわないと知っても、もう受け入れるしかないのだ。

でもそれでもいい。

今のぼくは、まえのぼくとは違うのだから。

「みどり」

もういつかい呼んでも、みどりはへんじをしない。

もうかれこれ2時間ほどまっているけれど、みどりはやってこない。それでもぼくは待ち続けようとおもった。

1時間

2時間…

「…」

もうオレンジ色はどこにも残ってはいない。

あたりはもうまっくらで、誰も公園にはいなかった。

「みどり？」

呼んでみても、だれの声もきこえない。

みどりはこなかった。

ぼくはあきらめとともにおおきなためいきをひとつ、虚空にはなっ

た。

ぼくはゆっくりとベンチから腰をあげて、公園中を見渡したがやはりだれもいない。

「…どーせ、むりなんだよな」

苦虫をかみつぶしたように、ぼくは自嘲をこめ笑った。

もう、おそすぎたのかもしれない。

甘い後悔とともに、夜の帳がおりてくる。

「もうあきらめるしか…ないよね」

途端に、自分がすぐくみじめに思えて、もう一回ぼくは唾った。

今となつては、すべてが懐かしく思えた。

「ただいま」

そういつて扉をあけると、母の出迎えがあつた。

台所からか、肉の焼けるいいにおいがする。

「おかえり。ごはんできてるわよ」

それを聞いてうなずいてから、ぼくはくつをゆっくりと脱いで、棚へとほおりこんだ。

部屋へはいつてみて、まず目についたのは朝にあつた紙がないということだった。

もう、役所へだしたのか？と思いつつぼくは席に着く。

するとハンバーグがのつた皿が置かれて、母もゆっくりと席についた。

「いただきます」

母はそういつて、もくもくとハンバーグをたべ始めた。

ぼくもそれを見て、手を合わせてからたべ始める。

しばらくお互い黙っていたが、母は離婚についての話はしないようだ。

だからぼくもその話はあえてしないように、テレビをつけた。

瞬間、テレビからおおきな笑い声が響く。

「なにがおもしろいんだろうっね」

「さあ」

「さあつて」

母のこたえにぼくが苦笑すると、母もすこし笑つた。

「あ、あの芸人、母さんしつてる」

テレビでおどけてみせる若い芸人を母は指差す。

「へえ、よくしつてんね」

「だって、おもしろいじゃない」

「そうなの？あんまおもしろくないんだけど」

「母さんにはおもしろいのよ」

「へえ」

母とこんなに会話したのは久しぶりなような気がする。

みどりのことも気がかりだったけれど、今は母とのひとときをぼくは楽しむことにした。

いつか、母ともお別れのときがくるだろうから。

それに、こんなにたのしそうなのを久しぶりにみたからというのもある。

今まで苦労かけたぶん、こつこつとところで母を言ばせたい。

そう、ぼくはすなおに思った。

お風呂にはいつて、ふとんにもぐりこむ。

電気をけして暗くなると、とたんに人肌が恋しくなって、みどりのことを思い出す。

てくてこ歩く姿とか、きゃらきゃらと笑う笑顔とか。

ぜんぶがぼくをうれしくもさせたし、かなしくもさせた。

あの笑顔が、声が、姿が、もう見れないのだと思うとすごくかなしかった。

かなしいというより、切なかった。

「きみにあいたい」

なんて、ベタすぎる歌詞が口からもれてきてしまっくらいに。

かなわない恋だとしていても、逢いたいとのぞんでいる。

いままで感じたことのない自分が此処にいて、すこしだけ気恥ずかしくなった。

母と父も、むかしはこんな風に恋したのだろうか。

今ところは離れてしまっているけれど、すくなくとも昔は愛しあっていたのだろうか。

そして、ぼくがこの世に産まれてきたのだろうか。

切なさがこらえきれなくて、ぼくは腕で足をつかんで丸くなる。

おさえられないものがこの世にあったなんて、今はじめてぼくは知った。

自然になみだがひとしずく、ぼろりとおちてふとんを濡らす。

嗚咽とかは出なくて、ただなみだが流れただけだった。

「おはよう」

「あ、おはよう」

朝、起きてきたぼくに母はにこやかに笑った。

「ごはん、できてるわよ」

「うん」

「すわって」

その声にしたがって椅子にすわると、いつもとおなじように朝食が運ばれてきた。

今日はおみそしると、まっしろなごはんのようだ。

あかみそが使ってあるのか、おみそしるのなかは赤かった。

「いただきます」

また母からたべ始めた。

ぼくもいつもどおりそれに便乗する。

おみそしるを飲んでみると、やっぱりあかみそらしかった。

「あかみそ」

「ん？」

母はぼくが唐突につぶやいたからか、ふしぎそうな顔をした。

「あかみそ、つかってあるの？」

問いかけると、母は自分のおみそしるをしみじみとみた。

「うん。たまにはいいでしょ？」

「そおだね」

「おいしい？」

「うん」

母が離婚をしてからだろうか、元気になった気がする。

それは確かな事実で、ぼくをすこしだけうれしくさせた。

きょうもまた学校へ行く。

いつもこのくりかえしだと思って、毎日朝がくるたび憂鬱だったが、今はもうそんなことは感じない。

「いってきます」

「いってらっしゃい。きをつけてね」

「うん」

とんとん、とつま先を床に打ちつけてから扉をあけると、朝日がぼくをまぶしく照らした

きょうの空は晴れやかだった。

逢坂が朝日を背にはしってくるのがみえる。

「しろー」

「逢坂」

「おはよう」

「ん」

ともだちと登校するなんて、すごく久しぶりなような気がする。失ってみてはじめて、ぼくは逢坂のたいせつさを知った。

みどりのことも、きつとそうだ。

失ってみてやっと、ぼくはみどりに抱いた想いを知ったのだ。

今日は、もしかしたら逢えるかも知れない。

すこしだけ淡い期待を胸にだいて、ぼくは逢坂と笑みを交わした。

逢えたら、この想いをつたえようか

…

そんなことか逢坂と話しながら、ぼくは考えていた。

学校がやっと終わって、ぼくは即座に公園へ一直線にすすんだ。きょうこそは逢いたい。

その一心で、ぼくはずかずかと公園へ立ち入った。

「みどり…?」

夢にまで見た逢瀬かもしれない。

みどりが、鳥と戯れていた。

そのか細いうでをのばして、鳥と戯れる姿はまるで天使のようで、ぼくはしばらくみどりに声を掛けることすらためらわれた。

「あれ、ひょうがら…」

みどりはヒョウ柄をきていなかった。

そのからだに、まっくらな大人のワンピースを纏っている。
珍しい。

「しろちゃん」

みどりがこちらにきづいて、ぼくを呼んだ。

その表情に笑顔はなくて、真っ赤な瞳をしていた。

まるで、一晩か泣き明かしたかのような瞳だった。

ぼくはゆっくりとみどりに歩みよって、ベンチへと腰を下ろした。

そんな表情をされたら、こんな想いをつたえることなんてできない。

「ねえ、しろちゃん」

みどりはそういいながら左手のくすりゆびをまじまじと見つめていた。

「しあわせって、なに」

黒いワンピースを着ているからだろうか、みどりがいつもと違って見える。

なんだかいつもの明るさがきえて、かなしみだけをまとったような声だった。

「こたえて」

ぼくが黙っていると、みどりは怒ったように言った。

こんなに怒っているみどりを、ぼくははじめてみた気がする。

「…しあわせ…かあ」

「そうよう」

「わかんない」

みどりはまた怒ったような、困ったような表情になった。

「…でもさ…しあわせって、けっきょく本人がきめることじゃない？」

「え？」

「だってほかのひとが、あのひとってしあわせね。っていてもそのひとがそう思わなかったら、しあわせじゃないじゃん」

みどりは黙っている。

口をきゅっとむすんで、下を赤い瞳でずうっとみつめていた。

太陽がみどりを照らして、みどりの左手のくすりゆびもいっしょに、ひかった。

みどりとぼくは、それをまぶしく見つめて、空をみた。

「ふうん、それがしあわせなの」

「わからない」

みどりは品定めでもしているかのような目つきで、ぼくのほうをうかがっている。

やっぱりきょうのみどりはどこか違う。

なにかに怯えているような、そんなかんじだ。

「みどりは、しあわせじゃあないの？」

そうだよ。そんなしあわせな証までもらって、普通のひとからみればしあわせ一杯だ。

でもみどりはぼくが問いかけたたん、ぱつとこちらを見て、眉をふかくしかめた。

怒っているようでそうでない。

かなしんでいるようでそうでない。

なんともいえない、ふしぎな瞳だった。

「…しあわせそうに…みえる？」

その声は小さくて、耳をすませないと聞こえないくらいだったけれど、なぜか今のぼくにはよく聞こえた。

そしてみどりは、かなしそうにふんわりとほほえんだ。

風が、木の葉が、いまのみどりをどこかへ連れて行ってしまつような気がする。

とめなくちゃいけない。そんな衝動にかられて、きがついたらぼくはみどりを抱きしめていた。

やわらかいかおりがみどりからする。

みどりの身体が一瞬こわばったのがわかったが、ぼくは離すことができなかった。

離してしまつたら、みどりがどこかへいってしまいそうで、こわか

った。

みどりは何もいわない、なにもしようとはしないし、拒否すらせず
に、ぼくに身を預けていた。

布ごしに、みどりのきやしやささが伝わってきて、よけいにどこかへ
行ってしまいそうで、ぼくは不安になった。

「……しろちゃん……痛い……」

みどりの声がかきこえてきて、やっとぼくははっと目を覚ます。

「ごっごめん！」

あわてて手を離すと、みどりはうつむいていた。

それ見た瞬間、ぼくは激しい後悔の波におそわれる。

「……ごめん」

ぼくが謝っても、みどりはなにも答えないから、それが更にぼくに
追い討ちをかけた。

どうして、あんなことをしてしまったのだろう。

自分でも、顔がどんどん赤くなっていくのがわかる。

「……ばいばい」

それがきこえたと思った刹那、みどりは走り去って行ってしまった。

ぼくはそれを追いかけることもできずに、ただただベンチにすわっ
ていた。

どうしてあんなことをしてしまったのだろう。気付いたら、ぼくはみどりを抱きしめていた。

自分のなかに、違う自分がいるように思えて、こわかった。

そして、みどりは「ばいばい」といつて去ってしまった。

もう、ほんとうに合えなくなってしまっただろうか。

ぼくは寝返りをうちながら、なんどもなんども激しく後悔した。

「ああ…もう」

でもあのときのみどりは、ほんとうにおかしかった。

なにかに怯えているような瞳。

そしてぼくがふと抱いた衝動。そんな衝動、今までのみどりにはまったく感じなかったのに。

みどりが消えてしまっ、なんて。

一体、みどりはどうしてしまったのだろう。

考えてみると、抱きしめた時のみどりの声は震えていたような気がするし、ぼくを拒否しなかったのもおかしい。

わからないことだらけで、いらいらする。

自分にも激しく後悔はしていたけど、自己嫌悪とかは、ふしぎと感じなかった。

目を開けると、もう朝だった。

いつのまにかぼくは寝てしまっていたらしい。

ぼくはそのままでもぞと起き上がって、時計を確認すると、ふとんから這い出した。

「しろ、あなたきのう服あらってないでしょう」

リビングに入った途端、母の甲高いこえがして一瞬からだがかわばった。

そういえば、きのう洗濯をしていなかった。

「じめん」

「もう。ちゃんとしなさいよ」

「うん」

目をこすってみると、視界がぼんやりしておぼつかない。

ふらふらの足取りでリビングに踏み出すけれど、ぐらついて、みどりの声が耳から離れない。

ノイズ、雑音もぜんぶ、ぜんぶまじって神経細胞さえも凌駕した。

「…しる？」

母の声ではっと現実へ引き戻された。

パジャマの下に、たった数秒だけですごい汗をかいていた。

「ごはん、たべて」

母に促されるままに椅子にすわる。

するとそこにはすでにしゃけとごはんがおいてあった。

痛い

いたい

気付かないようで、こころがいたい。

「いただきます」

きょうはぼくからたべ始めた。

なにかしてないところのなかの痛さにおしつぶされそうで、こわかった。

みどりが消えそうになったときと、同じ。

閉じこめていないと、なにかが消えてしまいそうで。

ふしぎなくらい、もろいものが、ぼくの中に巣食っていた。
なにかがいとおしいから、失うことがこわいのだ、と。

それはいつだってぼくの中で風のようにささやいていた。

不安、とかじゃなくて、でも希望、とかでもない。とにかくふしぎで仕方がない。

「きみようなかんじよう」

つい、ことばにだしてしまつたら、となりで口笛をふいていた逢坂がきよとんとした顔付きでぼくを見つめた。

それがわけもなくビーバーのように思えて、ぼくはぶつと噴出してしまった。

「なんだよ、おまえ」

「ああ、ごめんごめん」

ぼくがあやまると逢坂は気味の悪そうな目で、またじいっとぼくを見つめた。

「しろ、おまえヘンだぞ」

「え」

「さいきん、なにはなしてもうわの空、っていつか」

「そうかな」

「そーだよ」

逢坂は納得したように腕をくんで、何回もつんつん、とつなずいた。
逢坂ごしにみえる青空がまぶしい。

「でも、なんだかおまえうれしそうだ」

「え」

「なんとなく、だけどさ」

照れたような表情になって、逢坂はききき、と謎の笑みを浮かべた。

うれしそう、なんていわれたのは何年ぶりだろう。

こどものときから、仏頂面な子ねえ、とか母ともだちにいわれていたのを覚えている。

両親ですらあまりいわないのに、逢坂がそういつてくれたことがうれしかった。

逢坂が、そう感じてくれたことが、わけもなくうれしかった。

「あは」

ぼくはそうおどけて、逢坂の笑い方をすこしだけまねした。

だけれどそれは、あまりにも逢坂に似ていなくて、ぼくたちはお互い顔を見あわせて、笑った。

いとしい、と、いとおいしいの意味はちがうようだ。

ならば、ぼくがみどりに擁く想いはきつと、いとしいだろう。

痛いいたいと嘆いても、そこにはどこかいとしさがあるのだろう。

目を開くと緑色のはっぱがぼくを覆うように広がっていた。

葉と葉のあいだからこぼれおちるひかりが、ぼくをくすぐる。

学校の屋上にはえた巨木の下で、ぼくたちは昼寝をまったりと楽しんでいた。

「しろ」

となりでも逢坂が寝転んでいる。

逢坂はもうすっかりうつらうつらしている、と思っていたぼくはす

こしだけおどろいた。

「きもちいいな」

「そだね」

「いま、なんじ」

「しらない」

「おくれたらどーするんだよ」

「しらない」

「まーいーや」

「うん」

逢坂は寝返りをうつて、ぼくに背を向けた。

「あ、鐘」

でっかい鈴をならしたような、長いか行の音がきこえてきて、げんきに遊んでいた生徒たちはみんなあわてて教室へはいつていくのが見える。

ここからみると、みんな蟻のように小さい。

「さぼる」

「ん」

「おまえは？」

「それでいい」

逢坂と意気投合して、ぼくはまたうつらうつらとすることにした。ここならきつと、先生たちにもみつからないだろうし、ゆっくりと休憩できるはずだ。

こんなめまぐるしい学校生活のなかで、休みは必要なのだ。

ぼくはそう思って、にしし、とガラになく下品な笑みをうかべて、夢の世界へと足を踏み入れた。

さいごの夢にでてくるのはきつと、みどりだろう。

ぼくはなんとなく、そうかんじた。

淡いとうめいのざくろ色の水に、ぼくは手をゆっくりとひたした。ちやぷん、とゆらゆらした音が鳴って、世界全体が共鳴する。

「くらあい」

「くらあい」

「こわあい」

遠くで、あのこがつぶやいている。

痛い、いたいとこころが叫ぶ。

くらやみのなかで、視力がないぶん聴覚が発達したのだろうか。いつもはきこえない、自分のこころの声までがまっすぐに響いてくる。

「あ」

そうつぶやいたとたん、ぼくはざくろ色の水の中に、なにかひかるものを見つけた。

くらやみのなかで、それだけがまぶしくひかりかがやいている。

ひとさしゆびと、くすりゆびで優しく、夜店の金魚を掬うようにぼくはそれを掬いあげた。

ぼたり、ぼたりと腕をつたってざくろ色の水がしたたって、おちる。ふと耳をすますと、あのこの声はきこえない。

ただひゆるる、と風がぼくを感情もなくすり抜けていくだけだ。

「みどり」

ぼくが掬ったのは、どうやら指輪のようだった。

さきつぽにちいさな緑色のきれいな石がくっついていてる。

「らびすらずり」

その石の名をつぶやいてやると、石はまた、きらきらと言ぶように輝きをましていった。

「…こわして」

急に、やんでいたあのこの声がまたくらやみから聞こえてくる。

声は風にかきけされ途切れとぎれでよくわからない。

「して…こわして…壊して！」

その声はだんだんと大きくなった。

これを、壊せとっているのだろうか。

まるで意思をもつかのように、らんらんとひかりかがやくこの石を。

「どうして」

「…こわして…こわして…」

声はぼくの問いには答えずに、ただただ嘆願するばかりであった。

「…これを…こわせばいいの？」

「…」

返事はない。

ぼくは深呼吸をしてから腕をおおきくふりあげて、一気にそれを床に打ち付ける。

刹那、ぱりんと何かが壊れた音がした。

そしてそこからあまりにもつよい緑のひかりがあふれだして、ぼくは目を開けていられなくなった。

「…うわ…」

だんだんと、意識がうすらいでいく。

消えゆく意識の中で、誰かがぼくに、ほほえんだ気がした。

ぼくはその日、公園にもういちど足を運んだ。
でも、みどりはいなかった。

あくるひも、あくるひも、みどりはそこに、存在すら示さなかった。
うあなだれることにも、ぼくはただ慣らされて、このままおとなに
なるのだろうか。

ただ、あきらめだけをおぼえて、おとなになっていくのだろうか。
梅雨があげた、空の蒼さをいまは忌々しく感じた。

きみがいない世界が、こんなにも寂しいものだということをぼくは
知る。

「おまえ恋してるだろ」

ぼくのことなんてお見通し、とでもいいいたげな表情をうかべて、机
に突っ伏していたぼくに逢坂が言った。

「だったら」

「協力、しようかなって」

「むり」

あっさりと断って、ぼくはまた昼寝をはじめた。

逢坂がぼくを起こそうと、必死でぼくの肩をゆさぶる。

「なんだようっとうしいな」

「協力させる」

「だから、いらないうっつってんじゃん」

ぼくの冷たい反応をみて逢坂はからだをくねらせながら、

「もう、しろちゃんつめたーい」

とか女子っばく高い声でいつてきた。

クラスのみんなからの視線がぼくたちをとらえる。ああ、最悪だ。

「おまえ、まじうつとうしい」

きつと逢坂を遊び半分でにらむと、逢坂はしぶしぶぼくのとなりの席についた。

「なんでそこすわんの」

「おれのかつてでしょ」

開き直りやがって、とこのころの中で呪詛をとなえた。

逢坂は鬱陶しいけれど、みどりにあえなくてしよげこんでいるぼくのこころを、すこしだけほぐしてくれた。

季節は夏から秋へうつりかわって、世界すべてが色づきを変えていく。

けれど、みどりを失ったぼくには、すべてはモノクロでしかなかった。

みどりは、どれほど待っても相変わらず公園にはこなかった。

ぼくの中で、時がたつほどにみどりは存在を大きくしていくのに、肝心のみどりが、そこにはいない。

みどりのいない、空白の時を重ねることに、あのとき抱いたみどりの体温が、感触が色彩をなくすどころかより鮮やかになっていく。みどりに会えない今となっては、それほど狂おしいものはないのに。みどりの不在になれさせられるほど、ぼくの想いは軽いものではなかったから、それは当然だろうか。

みどり、みどり、みどり、みどり……。

何度呼んでも、もう、もどらないのに。あえないのに。

もしかしたら、なんて希望のために、ぼくは何度も声をからした。

手をのばしても、どうしてもどうしても届かないきみに、やっと合間見えることができたのは、それから数日後だった。

その日は、雨がふっていた。

誰もが傘のなかに身を隠して、急に冷え込んだ寒さを感じつつ町を

あるいていた。

ぼくは逢坂といっしょに、町を散策していた。

流れていく人、人、人。

その中で、みどりと出くわしたことは、奇跡よりもかがやく、なによりもすごいものだったのかもしれない。

もし、これが運命とよばれるものならば、ぼくは、神様に何回も何回も感謝したい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2462c/>

.草原ベンチ

2010年11月14日09時34分発行